

News Letter

JASTEC 中部支部 冬季研究大会(浜松) まとめ

平成26年2月2日(日)、日本児童英語教育学会(JASTEC)中部支部では、初めて冬季大会を静岡県浜松市の浜松学院大学において定期研究大会を開催いたしました。第2回目となった研究大会(浜松)の内容には、「ワークショップ」を始め、「現場からの実践発表」、近年注目されつつある「幼稚園における英語教育の現状と可能性」、教科科に向けてさらに議論が必要な「評価のあり方」、そしてこの10年、小中の連携が叫ばれる中、なかなか現実はうまく接続されていない「小中連携」について意見交流が行われました。

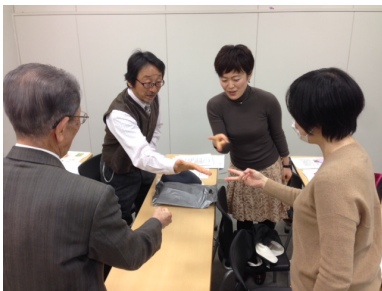
普段よりも、現場の先生の参加、大学生の参加が多く、とてもアットホームな雰囲気の中で、研究会を開催することができました。また、このNews Letterの各発表のまとめも浜松学院大学の学生により作成されました。

ご発表頂いた方、運営のご協力をしていただいた浜松学院大学の学生のみなさん、そして、今回急ぎょ静岡大会の実行委員長を代理された駒澤先生のご尽力に感謝申し上げます。

(中部支部事務局 新井謙司)

ワークショップ(1)

「クラス作りに使える外国語活動のアクティビティ」 加藤 拓由 (春日井市立神屋小学校)



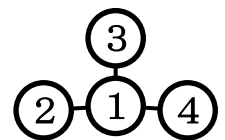
「クラスで誰か一人が突出した時代ではなく、みんなで作り上げる時代である」と加藤先生は語られた。だからこそ、学校生活において子どもたちが生活しやすい環境を作っていくことが重要であり、そのためには良好な人間関係で結ばれたクラスづくりに努める必要があるという。今回、私たちは外国語活動におけるアクティビティを介して、良好な人間関係を築いていくための方法を学んだ。加藤先生によれば、良好な人間関係づくりには「4つのC」、すなわち、Contact (ふれあい)、Communicate (伝え合い)、Cooperate (支え合い)、Connect (つながり) が重要であり、そ

れらを繰り返し体験できるアクティビティを3つ紹介された。具体的には①Eye Communication、②Pen & Pan、③ドキドキ・ネームコールである。

この中から③について紹介する。このアクティビティでは、4人1組になり、各人に1~4までの番号をつけ、右図のように立つ。1の人は、司会の指示通りに動く。

「Go straight」、「Turn right/left」、「Stop」という4つの指示がある。指示を何回か繰り返した後、「Stop」と言われたら、向かい合っている人と名前を言い合う。この時、相手の名前を先に言った方が勝ちというアクティビティである。また、回数を重ねるごとに、例えば互いに目を閉じたりするなど、指示がより難しくなるという工夫が施される。体験中の会場の様子は、活気に満ちあふれ、コミュニケーションが自然と生み出されていた。たとえ失敗したとしても笑い声が聞こえ温かい雰囲気に包まれていた。アクティビティ後の感想の中にもあったが、相手の名前を覚えようとする姿勢や失敗しても笑い合える環境が自ずと作られていくことが分かり、クラスづくりの1つの手段として活用できると実感した。

ワークショップの最後に加藤先生は外国語活動の教材である「Hi, friends」の扱い方についてご自身のお考えを披露された。基本は文部科学省が提示している指導案の通りで構わない。その流れの中に1つでいいから、自分のこだわりを持ち、アクティビティを入れてみる。そうするとクラスに活力が生まれ、一味違う外国語活動ができる、ということであった。アクティビティは英語を声に出すだけでなく、体リズムをとったり、指示通りに動いたりするため、緊張をほぐす効果があった。よって、児童の気持ちをリラックスさせ、和やかな雰囲気を作り出すことができると感じた。さらに、自分のこだわりを授業に取り入れていくことで、子どもたちの学びがより深くなるとともにその幅を広げることができるため、児童の興味・関心をより引き出すことにもつながると感じた。



文責：天野小春・細田彩加 (浜松学院大学3年次)

研究発表①：伝えたい思いを大切にする外国語活動

「自分の思いを持ち、友達と関わる喜びを実感するための外国語活動をめざして」

久米 優子（浜松市立浅間小学校）

「友だちと関わり、思いを伝え合うことが楽しいと感じる外国語活動をめざして」

勝永 操（浜松市立蒲小学校）



久米先生は、英語に対する児童の不安感を取り除き、コミュニケーションの充実を図ることを目指されており、特に英語を用いながら友達と関わる喜びを実感するという点に重きを置いた授業実践を発表されていた。久米先生による実践の特徴は、児童の実態に即した教材設定とコミュニケーションを楽しめる創作活動を行うことにある。例えば創作活動においては、児童のオリジナリティを取り入れる余地を多く残したり、誰々のためという相手意識を持たせたりすることで、自分の思いを明確にすることを重視されていた。そうした仕掛けにより、児童たちは自分の

思いを伝えたいという意欲が湧き、友達と関わることの楽しさを実感することができたという。

勝永先生も久米先生と同様、コミュニケーション活動の充実を図り、「英語を学ぶ」という事に対する児童の不安を取り除くことを主たる目的に据え、これまで研究に取り組まれてきた。特に、児童たちが相手を意識したコミュニケーションや自信をもったコミュニケーションがとれるようにするため、教材との出会わせ方にこだわりながらスモールステップによる授業デザインを工夫されていた。その結果、外国語活動に対する不安は解消され、「楽しい」と感じる児童が増えたということであった。一方で、教科としての「英語」に対する不安は、十分に解消することができなかったと今後の課題を述べられていた。

これらの実践報告を受け、児童の英語に対する不安感を解消し、意欲的かつ積極的なコミュニケーションの姿を引き出すためには、児童の実態に即しながら教材との出会わせ方を丁寧に工夫したり、授業をスモールステップで組み立てたりすることが重要であると改めて感じた。ただし、児童の外国語活動に関する不安感を解消することはできたものの、教科としての英語に対する不安感は十分には解消されていない。英語を読み書きすることへの不安感を解消するためにも、やはり小学校から中学校への学びの連続性を見通しながら、円滑な指導を考えていく必要があると思った。

文責：川西真夢・清水由真（浜松学院大学3年次）

研究発表②：中学校区で推進する小中一貫教育

「コミュニケーションで楽しい授業を目指して ～外国語活動の学びを活かす取組」

岡本 陽子（浜松市立東陽中学校）

「グローバルな視点で考え、主体的に英語でコミュニケーションを図る力の育成」

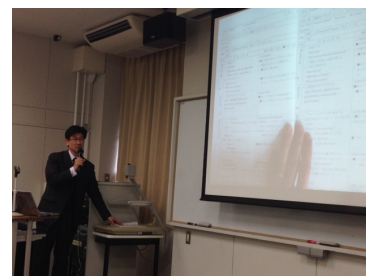
井浪 秀一（磐田市立磐田第一中学校）



まず岡本先生は、中学校の英語教育に小学校外国語活動の学びを活かす方法について、これまで研究を進められてきた。小学校では「話す・聞く」活動において、友達と交流したり協力し合ったりする中で、子どもたちが「ほめられたい・伝えたい・知りたい」と思うことのできる活動を積極的に取り組まれてきた。そうした活動を中学校でも行うことが大切であるという課題意識に立ち、小学校で扱った教材を中学校の授業に生かしながら、中学校でもペアやグループでコミュニケーション活動を積極的に試みられた。なお、ここでいう外国語活動の学びを活かすとは単なる教材の活用だけでなく、児童へのかかわり方や授業の進め方などを活かすことも意味する。そうすることで、小学校の外国語活動で蓄積されてきた音声による学びが、中学校の英語教育で文字と結びつくようになり、生徒たちは英語学習をより楽しいと感じ、より確かな実力として見についたと感じるようになったという。

次いで、井浪先生はこれからの時代は世界の様々な文化を受容し、それに対応できる人材の育成が不可欠であるという将来展望のもと、これまで取り組まれてきた研究の成果を発表された。具体的には、グローバ

るな視点で物事を考え、主体的に英語でコミュニケーションを図る力を小中一貫で育成していくために磐田市で開発された「磐田市版『英語』モデルカリキュラム」における各種実践やその成果が披露された。例えば、音読のスキルアップを図るための速読をはじめ、マイ辞書を利用した授業実践、児童・生徒が気軽に英語に触れることのできる環境構成としての英語の書籍購入、及び、より実践的な英語力を身につけさせるための修学旅行英会話などの実践が紹介された。こうした各種実践を小・中学校が連携／一貫しながら展開し、子どもたちの学習を深めていくことにより、現代社会のニーズに応えられるグローバル人材を育成することが期待できる。その際、発表全体を通じて、小学校においても、中学校においても、グローバルな視点に立った英語教育では、何を聞かせ、読ませ、話させ、書かせるのか、その内容にこだわりを持つとする姿勢が窺え、そこから私たちも学ぶことが多かった。



文責：松浦萌子・蒔田かおり（浜松学院大学3年次）

研究発表③：幼稚園の英語教育

「急増する英語幼稚園を支える仙台発カリキュラムとは」 鈴木 克義（常葉大学短期大学部）

鈴木先生の研究発表は、今後、TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）が締結されることによって英語を使用言語の一つとするプリスクールが急増するという話題から始まった。TPP が契機となり、多くの人材が外国から来日することが想定され、英語を使用言語とする保育園の需要が増えるとともに人手不足の保育園がさらに増加する。また、他国と貿易等で関わり合いを強めていく際、日本人にとって最大の障害となる言語、とりわけ英語に幼児期から慣れさせておく必要があるという。そこで、今回の研究発表では、幼児期の英語教育にふさわしいプログラムとして、鈴木先生が注目されている GrapeSEED について紹介がなされた。

現在、GrapeSEED は、例えば仙台の明泉幼稚園で導入されている。これまで児童英語教授法 PLS システムがよく使われてきたが、GrapeSEED は PLS と内容はほぼ変わらないものの、PLS よりも教師への研修等のサポートが大きい点に特徴がある。また、GrapeSEED の教材開発は、数多くの著名な映画やドラマ、アニメーションの制作に携わってきたエキスパート達によって担われており、より魅力的にビジュアル等に訴えかける仕掛けが組み込まれている点も特筆できる。一方で、国際的に数多くの実績をあげてきている GrapeSEED を、今後、日本においてより効果的に活用していくためには、ネイティブの先生を採用していくという現実を踏まえ、日本人でも教えやすいプログラムにしていく必要があると課題が提示された。また、現代社会は情報社会であり、情報機器を積極的に取り入れた教育が、今後、必ず重要になってくることから、iPad 等のマルチメディアを使用する方法も模索していく必要があると提案されていた。

鈴木先生の発表を聞き、私たちは幼児期における英語教育の効果的な方法の手がかりを得ることができた。やはり日頃から自然に英語に触れる機会を確保することが重要であり、さらに、子どもたちが親しみをもって進んで英語を学ぼうとする魅力的なプログラムや教材開発、その利用方法ならびにマルチメディアの積極的活用が重要であると感じた。

文責：山本晴香・橋下桃江（浜松学院大学3年次）

研究発表④中学校英語につながる小学校英語の目標と評価のあり方

小学校英語用「自己評価ポートフォリオ」試案作成を通して 伊東 弥香（東海大学）



伊東先生の発表から、私たちは小学校英語と中学校英語の接続を円滑なものとするために、「評価ポートフォリオ」が活用できるということを知った。ここでいう「評価ポートフォリオ」とは、言語を習得していく過程を項目化し、段階に沿って言語習得の達成状況を評価していくものである。例えば、第1項目においては「英語の音素や単語等を使用し、短文を話す」といったような内容が示されている。伊東先生は元々アメリカで作成されたものを翻訳し、独自のポートフォリオ（案）を作成された。各評価項目には、それぞれの言語習得段階に見合った活動例も併記されている。

また、各評価項目の妥当性を分析するため、教職課程履修中の学生や小学校外

国語活動の経験者である公立小学校教員等を対象としたパイロット調査を実施された。各調査は、各評価項目に沿う諸活動が小学校英語においても指導可能であるか、それらが適切な内容であるかを判断するものである。調査の結果、ほとんどの評価項目に関する内容が適切であり、指導も可能であるということが明らかになり、小学校英語においても「聞く・話す」活動だけでなく、「読む・書く」活動を展開できる可能性が示された。加えて、音声中心の活動に文字に親しむ活動を組み込む等、各活動を総合的に導入することにより、児童の文字に対する認知的発達の素地を培うことができるという見通しが得られた。

私たちは、伊東先生の発表を通じて小学校段階で児童の言語習得に関する認知的発達の素地を総合的に培うことが、中学校英語で主に扱われる「読む・書く」学習に対するギャップを軽減するとともに、小・中学校で繋がりのある英語教育の実現に寄与できることを学んだ。今後、私たちは実際に評価ポートフォリオを活用した効果的なカリキュラム開発や授業展開の方法等を学んでいくことで、より実効性の高い小中一貫教育を推進していくための指導スキルや知識を身につけたいと思った。

文責：宮下千広・井村和奏（浜松学院大学3年次）

パネルディスカッション

「小中連携を考える」 —指導内容・指導方法の連携を求めて—

パネリスト 池田 勝久（浜松市立北小学校）

中島 潤（浜松市立西部中学校）

柳瀬 昭夫（静岡県総合教育センター指導主事）

コーディネーター 巽 徹（岐阜大学）

発言

中島：小学校の英語活動を中学で生かそうと試みる

- ・ 「英語ノート」を活用する
- ・ 授業計画を立てる時に小学校の経験を加味してみる
- ・ ITCの活用（ITCとは電子機器のことで、視覚・聴覚に訴えかけることができるので、文字と発音を結びつける手がかりにする）
- ・ グループ活動を充実させる。英語活動のなかで、CMを作り、発表しあったりして効果をあげたので、中学でもその様な活動を試み、天気予報の継続発信を計画した。



池田：英語活動と英語科をつなぐ

- ・ 英語活動での音声や絵による内容把握→何となくわかる→語彙の確認→文法確認
- ・ 英語活動で英語を使おうとする雰囲気や流れが身についている（classroom English）→教師やALTの話す英語、教科書や副読本を聞く（Teacher Talk）
- ・ 英語活動の中で頻繁に行われる、ジェスチャーによる理解力のよさ→英語をバラバラでなく塊で理解する能力を養う→その塊りに、意図的に既に学習した単語や表現を加えて言語活動を豊富にしてゆく
- ・ 小学校の言語活動に文法指導をプラスすることによって、英語を学習活動に変えてゆく

柳瀬：小・中連携を考える

- ・ 学校訪問して見えたこと
 - ① 小学校；英語に対する力の入れ方の優先順位は、低い。国語、算数、の次ぐらいにくるし、現場の先生方は不安を抱えている
 - ② 中学校；教科書の消化に精一杯で、研修をする時間がない。
「英語に対して外部が要求するレベルが高すぎる懸念を感じる」
 - ③ 連携の難しさ；小学校側と中学校側の温度差・・・中学校の先生方の小学校に対する偏見
小学校；英語の活動が中心・・・内容が重要
・・・あいまいさが許される
・・・定着を求められない

- 中学校；英語の学習が中心・・・言語形式が重要
・・・正確さが求められる
・・・定着させなければならない

実践 それぞれの発言内容を裏づける、教員側の実践活動が報告された

中島：学区の、別々の小学校から入学してくる中学生に共通するものが「英語ノート」なので、「英語ノート」の導入方法を工夫すれば中学に移行し易い道筋になると思った。

英語はスパイラルな学びが必要なので、小学校の英語活動を切り離すことなく、うまく中学校の英語の授業につなげていけば【英語は楽しい】という小学校時代の気持ちが延長されるはずだ。ただ、そのためには、小・中連携以前に学内の連携、及び学府内の小・小の連携が必要だと心得ておかねばならない。

池田：英語活動の中で、小学生がよく使う「ジェスチャー」による理解力を拡大して、伝達能力を育成することができないか、と考え ALT との協力で、例えば ALT と 1対1 で読みのテストを、担任の授業中に隣室でおこなう。ALT は、発音、読み方、ジェスチャーなどの指導をその場です。授業中の様子はビデオにとり、あとで、担任とチェックをし、評価する。

このような、多角的な授業は生徒たちにも好評で、「聞く」・「話す」・「読む」・「書く」などの基本的な活動に加えて、文法や単語も【以前よりは、わかるようになった】と思っている生徒が多いようにみえる。

柳瀬：英語活動と英語の学習との違いを明確にし、よく理解し、小学校も中学校も納得したうえで、一貫したカリキュラムを作成する必要がある＝市教委との連携

英語は積み重ねながら習得するものなので、小学校で学んできた英語を駆使して、中学校で、自己表現することができるようにしたい＝現場からのフィードバックを検証し、分析する。

フロアーからの質問

(1) 小・中兼務教員について知りたい

- 磐田市を例に挙げると、磐田市の場合、学区の中学校一校に対して小学校三校を一組と定めて、学府と呼んでいる。兼務教員は所属する学府内の小学校を巡回し、学科について指導、相談等をうけ、場合によっては授業を担当する。その分、中学校の教員としての担当時間を教育委員会より調節してもらっている。余分な負担がかかるわけではない。

(2) 専科としての、英語教員の養成については、どのような計画があるのか

- 文科省でもまだはっきりと決まっていないようである。

パネリストの補足

柳瀬：外国語教育によって、子供たちと夢を共有したい。

池田：コーチすることが大切。ITC 教材の目的と使い方の実地研修。

中島：曖昧さと正確さとのバランスを忘れてはならない。

コーディネーター(岐阜大学 異教授)は、各パネリストのポイントを外すことなく、巧みに発言を促し、1時間40分にわたる充実したパネルディスカッションを導きフロアーにも満足感を与えてくれた

文責： 松村美佐子 (元東海大学短期大学部)

このNEWS LETTERをごらんになった読者の皆様より、ご意見や感想、そして、JASTEC中部支部へのご要望などがございましたら、下記までご連絡をお寄せください。また、下記の中中部支部HPのアドレスには、これまでのNewsLetterも掲載しております。ご覧ください。

◎ JASTEC中部支部HPアドレス <http://jastec.filsa.net/>

◎ 意見・要望など kenjia1026@ybb.ne.jp

JASTEC中部支部 事務局 新井謙司
岐阜県高山市教育委員会